

聞名仏教

第102号
(発行日)

2018年3月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488

(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始
(8月は休みます)
- 〈念仏座談会〉
毎月12日 午後3時始
- 〈聞名の会〉
毎月6日 午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月18日 午後6時30分始

昼夜は過ぎ行けど

『ウダーナヴァルガ』という経典に

「昼夜は過ぎ行き、生命はそこなわれ、人間の寿命は尽きる。小川の水のように」

と説かれています。昼夜が実によく過ぎ去っていくことを日々実感します。そんなに早く過ぎ去らないで欲しいと思っても、容赦なく昼夜は過ぎ行きます。この「時の力」にはだれもかないません。どのような権力者も富豪も(時)を一瞬も押しとどめることはできません。

そして続いて

「この容色は衰えはて、病の巢であり、脆くも亡びる」

と説かれています。老衰の身であり、病の巢であり、危うい身であることも、高齢になるとイヤというほど身にしみてきます。

そういう人生にたいして、仏教は「長生きをせよ」とも説かないし、また「早く死になさい」とも言わない。

この世に縁がある間は生き、この世に縁がなくなれば死ぬ

人生なのだといわれるのでありましょう。

ではこうした人生全体をどう見たらよいか。それを浄土の教えに照らしてみますと、如来法蔵様は第十八願に「欲生我国」と仰せになつておられます。過ぎ行く身であり亡びる身をもつ私たちにアミダ仏は

「我が国に生まれようと願いなさい」と仰せられるのであります。いわば全人生を浄土に生まれるべく生きる人生なのだと思取りなさいと言われるのです。

我が国とは清浄安楽な浄土のことです。浄土に生まれたいと願いなさい。そこへと人生の方向を定めなさいとのお勧めであります。

ところがいついこの世の考えに影響を受けて、知らず知らず長生きと娯楽を目的にしてしまいます。

如来法蔵様から見れば、生きて居るのは今だけであり、

明日をも

知れぬ無常の身を

生きていると教えられる。今生きているその足元に死があつて生と死とは離れない。生死は裏表だ。今は生が表だけ縁がくれば何時でも死が表になる。にもかかわらず、何かまだ

まだ死は先であり、今は元気だから死などは考えなくてよいように思いがちです。しかしそれこそ凡夫の思いであつて、実際は死は何時でも隣り合わせにあるのです。

明治時代の高僧清沢満之師(一八六三〜一九〇三)は肺結核で血痰が出るので痰壺をいつも持つて生活をしておられたお方ですが、師の言葉に

「独立者は常に生死巖頭に立在すべきなり」という厳しいお言葉があります。

独立者とは、何ものにも束縛されない本当に自由な人の

《 念佛寺永代経法要 》

四月二十二日(月)

午後二時始

法話 岩佐幾代先生

*同日(四月二十二日)午前十時・勤行法話
(念佛寺住職の法話です)

ことでしよう。そういう自由を獲得しようとする人は常に「生死巖頭に立て」といわれるのです。明治人らしく非常に格調の高い言葉で仰せられています。

「生死巖頭」とは生と死の先端あるいは境目ということ、そこにいつも生きて居ることを忘れるなど。

清沢師は結核だったので、死は決して遠い話ではなくて身近なものと感じられていたのです。

しかしそれは清沢師だけの事ではなくて、私たちの現実でもあります。そこで独立者いわば本当に自由を得た人でありたいのなら、生と死の境目に何時もいるのだということをお勧めでありましょう。

今晚のいのちの保障はない、いわんや明日のいのちの保障もない。縁あればいつでも死

は現実となる。そういう生に今立っているのであり、立ちなさい、すなわち忘れずに生きなさいと言われるのでしよう。

実際には否応なしにそういう生と死の限界線に生きている私たちに對して、仏は「長生きをせよ」と言われぬのは当然です。

ではどう南無阿弥陀仏は仰せになるのでしようか。それは、「汝は今生きていて明日は死ぬ可能性に生きています。そういう危ういのちを今生きているのである。汝念仏申せ、我が浄土に生まれさせよ」と仰せ下さるのであります。

南無阿弥陀仏の仰せは「我、汝とともにあり。汝を浄土に生まれさせる」の仰せです。この南無阿弥陀仏を何度も聞くのです。南無阿弥陀仏を称え南無阿弥陀仏と聞く。そういう念仏生活とは、この仰せであり、誓いであり、救い主であり、実在なる力、それを聞かせていただく生活です。

はかりなきいのちの实在を知らせて下さる南無阿弥陀仏を聞く。その南無阿弥陀仏を聞くことは、単に死んでいく

はかない私というのではなく、死なない命がともにましますことを聞くのです。死なない自己をほのかに知らせていただくのです。死ぬ私に即して死なないいのちをお聞かせいただくのです。無量寿如来であるはかりなきいのちに摂め取られていることを聞かせていただくのであります。



(丁)

【念佛寺発行書籍】

- (一) 『木村無相・お念仏の便り』
- (二) 『松並松五郎念仏語録』
- (三) 『真宗の念仏と信心』
- (四) 『真宗教学の諸問題』
- (五) 『仏に会うまで』
- (六) 『佐々木蓮磨・法味寸言』

弥陀の大悲ふかければ

(和讃問答)

弥陀の大悲ふかければ
仏智の不思議をあらわして
変成男子の願をたて
女人成仏ちかいたり

(浄土和讃)

(現代語訳) 一切の衆生を救うという阿弥陀仏のあわれみは大変深く、障りが大きくなって仏になれないといわれてきた女性をことに取り上げて、不可思議な大悲の智慧によって十八願にかさねて三十五願を建て、女性の往生を誓って下さった。

* * *

D 「このご和讃は阿弥陀仏の四十八願の中の第三十五願のお心を歌にされたものです」
N 「第三十五願とは」
D 「それは、大無量寿経に説かれていた法蔵菩薩の、

たとい我、仏を得んに、十方無量不可思議の諸仏世界に、それ女人あつて、我が名字を聞きて、歡喜信樂し、菩提心を發して、女身を厭惡せん。寿終りての後、また女像とな

らば、正覚を取らじ。

という誓願です。この願は古来から女人を浄土に往生させようとの誓いであると言われて

ています」
N 「それならば十八願だけでいいのですか」

D 「三十五願が特に誓われたわけは、この大無量寿経が説かれた当時のインドの社会背景に

関係があります」
N 「どういふ背景ですか」

D 「今でもそれはありますが、当時のインド社会では女性は男性に比して劣った存在だと見られていました。そういう見方は、仏教にも影響し女性

は男性に比して障りが重く、たとえ仏道修行しても仏にはなれないとしばしばいわれていたのです」
N 「そういう女性観が根強くあつたのですか」

D 「ですから、一切衆生を救う本願が建てられてもなお、女性にはなれないのだという観念が染みついているので、さらにこの願を起こされたのだと思います」

N 「十八願のお心をさらに開示されたのですか」
D 「ええそうです。そうした偏った女性観に固執しやすい私たちに、弥陀の本願は一切衆生を仏に為したもうことをさらに強調するために女性が往生することを重ねて誓われたのだと思います」

N 「男尊女卑というのはインドに限らないですね。なぜ女性は男性より劣っているという偏見が生まれたのでしょうか」

D 「こういう偏見は世界各地にありますね。それにはいろんな理由があると思います。確かなことは分かりませんが、

女性は、生命を脅かすまわり

の外敵と戦うには体力や武力において劣る点があつたのが大きな要因ではなかつたかと思

います。そして農耕や漁業などの生産における力仕事において劣ると見られたのも一因ではないかと思

います。しかしそれは全体的な男女の優劣ではなく、男性と女性における役割の上での能力の違いなの

ではないかと思

います。N 「役割の上での違いなので、力仕事以外の他の能力、ことに新

てるといふ人間存在の基本に
関わる能力においては、女性
は圧倒的に大きな役割を果た
しますね。また平和を愛する
感性的な能力やこまやかなケ
アーなどは女性の方がかなり
勝れている能力だと思えます」

N 「ではなぜ仏教において、
女性は仏になれないというよ
うにいわれるのでしょうか」

D 「それはそのころの仏教教
団では、仏道は出家し厳しい
修行をして仏（阿羅漢）にな
るといふ道が基本でした。こ
うした道を歩むというのは男
性に比べて女性は困難な点が
あるからではないでしょうか」

N 「なぜですか」

D 「当時、インドの女性は十
代で殆ど結婚したでしょうが、
一端結婚すると出産、子育て
がついてまわりますし、自分
の子供への愛着は男性以上で
あると思えます。そうなる
と出家することは非常に難し
くなります。またたとえ出家
しましても、森の中などで修
行することは男性以上にまわ
りの環境が安全でなければな
りません。襲われるような所
ではおちおち修行はできませ
ん。それと女性の出家者がま
わりにいることは、愛欲を浄
化しようとする男性の出家者

にとつて修行の邪魔になると
いうことで嫌われた面もある
と思えます。よくありますね、
厳しい修行の場所では女人禁
制なんていう所があるように」

N 「こういうことは昔のイン
ドの状況でのことでしょうか
現代はどうなのでしょう」

D 「現代でもスリランカ、ミ
ヤンマー、タイなどの南アジ
アの仏教の盛んな国では昔か
らの慣習が残ってまして、仏
教教団では女性の出家修行者
は殆ど認められていません。
ただ在家者のままで専ら仏教
生活を真面目にする女性は結
構います。しかしながら北の
アジア諸国、中国や台湾や韓

国では女性の出家が許されて
いるばかりか、女性の修行者
は結構数が多いです。しかも
真面目に修行してまして、こ
うした国の仏教を支える大き
な力になっていきます」

N 「中国や台湾や韓国などで
修行する女性の出家者が真面
目であるというのはどういう
ことですか」

D 「男性の出家者は一時は出
家して修行をしても、還俗す
る人が多く、一生かけて修行
する人はそれほど多くはない
のが現状です。それに比して
女性は一端出家しますと、な

かなか還俗せず、真面目に修
行を続ける人が多いのです。
また台湾の仏教では社会的な
慈悲の活動を積極的にする尼
僧さんが目立ちます」

N 「戻りますが、この第三十
五願は〈変成男子の願〉とい
われ、女子を男子に変えると
いうような名前の願として表
されたのは、どうしてですか」

D 「四十八願には一願一願に
古来から名前がつけられてい
て三十五願は〈変成男子の願〉
と命名されていたのです。た
だし、宗祖は三十五願は女人
成仏あるいは女人往生の願と
いう内容として受け取られて
います」

N 「仏説無量寿経の三十五願
には、女性が女身を厭い、ま
た女性に生まれることはない
との誓いですね」

D 「ええそうですね。女性に
また生まれたいどころか、性
別を超えた仏にしたいという
のが三十五願の意味であって、
仏説無量寿経の三十五願には
女性がまた男性に成るとい
うようなことは出てきません」

N 「ではどうして宗祖は変成
男子の願名をここで使われた
のでしょうか」

ばれていたのでしょうか。一般
に変成男子の願と呼ばれてい
たのをそのまま使いになつ
ただけのことではないでしょ
うか」

N 「現代ではこれを問題にす
る人がいて、ここには女性差
別があると指摘される場合が
ありますね」

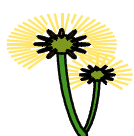
D 「ええ、ただ宗祖には女性
を差別的に見る見方はどこに
もないですね。むしろ人間は
凡夫として平等であり、また
全ての人は如来に大悲されて
いる存在として平等だと見て
おられます。それどころか三
十五願の内容は、女人をこと
に阿弥陀仏は大悲されて、女
性を成仏せしめんと誓いと
見ておられます」

N 「聖道門の仏教においては
女性が仏になることは大変難
しいというのが常識であり、
女性は仏になることが難しい
という嘆きがあつたのですが、
それをこそ救いたもう如来の
誓願であること、そこに弥陀
の大悲の深いことをこのご和
讃で讃歎されているのですね。
では〈変成男子の願〉という
呼び方はまったく根拠がない
のでしょうか」

D 「大経の異訳に『仏説大乘
無量寿莊嚴經』（莊嚴經）とい
う經典があります。それを読

みますと、女性は死後浄土に
生まれていったん男子となつ
て、それから仏のさとりを得
させようと誓つてあります。
これはこの經典が成立する当
時の、インドの社会や仏教教
団の考えが反映されていると
思います。どちらにしまして
も三十五願はことに女性を浄
土に往生せしめんと誓いで
す。そこで宗祖は、この誓い
は不可思議な仏の智慧から現
れてきた大悲のお心だと讃歎
されているのです」

(了)



（遠方法話予定）

○三月二日。福井別院。福井二組

門徒研修。午前。法話・座談

○四月二十一日。福井市。浄尊寺。

午前・午後。法話

○四月二十九日。姫路市。西源寺。

午後。法話

○五月四日。福井別院。福井二組

門徒研修。午前。法話・座談

○五月九日。名古屋。高畑会館

午前。法話・座談

（詳しくは念佛寺にお尋ね下さい）

『如来の御名』(上) 佐々木蓮磨

わが真宗に於て最も重要なものは、何と云つても如来の御名であります。宗祖は教も信仰も名号のほかにない、明らかに御示しになりました。まことに真宗の一流は、如来の御名を究明する以外に道はないのであります。かつて恩師佐々木月樵先生が「法然上人は一代佛教を究めつくして弥陀の名号を発見されたが、末代の同行は弥陀名号を聞くひとつで一代佛教を会得する」と申されたことがありますが、まことに意味深い御言葉として、今なお忘れることが出来ないであります。

しかし、今日の私共にとつて、如来の御名がそれ程に重大なものとして響くでしょうか。恐らく「否」と答える人が多かるうと思ひます。ここはお互い宗門人として深く反省したいと思います。よく「宗門の危機」という声を聞きませんが、その危機をもたらす根本は、宗門人が如来の御名を捨てているところにあるのではないのでしょうか。いかに教団が外面的に大きく栄えても、宗門人が本尊の御名に頼り

ぬようでは宗教としての生命はありません。生命なき宗門が危機を孕むのは寧ろ当然でしょう。では、その御名の尊厳を知らしめない障害は何処にあるのでしょうか。これについては、色々な見方もありますが、今ここで取り上げて検討したいことは、如来の御名そのものが、生きた人生に觸れて来ない、実生活と没交渉であるという点です。

そこで私は最も根本的な如来そのものに肉迫して、その本質を究め、やがて御名の性格を明かにしたいと思ひます。ついでには先ず如とは何かという事です。これは仏教の根本原理として古来説明はされていますが、どうもはつきりとはつかめないのです。これに就いては、古来の説き方に二つの缺陷があつたようです。その一つは、知性の及ばぬ境地として棚上にしたこと、他の一つは説明が余りに抽象的で取りつき場がないことです。こうした説明では何だか吾々の実生活と隔絶した感じがしてついて行く気になれぬのは当然だと思ひます。先般中外日報に発表された青年仏徒の

告白は明かにこの点を衝いて居ります。いかに高い境地であつても、現実の生活と何處かに連がりを見出すことが出来なかつたならば、人間にとつては全く無用の長物となるでしょう。それでは真如なるものは、人間の实生活と何處に連がりを持つかというに、私は最も誤魔化すことの出来ぬ現実の中に離るべからざる極めて鞏固な連がりがあると思ひます。

吾々が普通に現実と思つて居る世界は、実は真の現実ではなく、すでに心で畫かれ彩られた虚妄の世界でしかありません。しかも、それを真の現実と過信しているところに、人間の抜き難き迷妄が根を下して居ります。そのため万事について矛盾撞着、不如意に当面し、いよいよ苦んではいよいよ罪を重ね、果てしなき苦悩の旅をつづけているのが人間生活の実状ではないでしょうか。

そこで真の救済なるものは、人生生活に於ける個々の抜苦与樂ではなく、人間の根本的迷妄から醒めて真の現実、今のありのままに還るほかはないと信じます。平たく言えば、嘘の生活から真の生活に還るだけです。こうなると、今ま

で唯佛與佛の境界に棚上げして来た真如の至宝は、計らずも足下に光つて居ることになり、捜し求むべきものでなく、眼を洗えばよい訳になるのです。

かように説明すると、余りに気安く感じられるのですが、実はこれがなかなかの難事なのです。何故かというに、前に一言觸れましたように、人間というものは、どうしても自分の心で自分の世界を畫く

「そのままで」と教えてもすぐ自分の心で「このまま」とつかむものですから、真実の「ありのままの姿」は見えないことになるのです。この執拗な心の計らいは容易に取り去ることは出来ないのです。昔の修道者をどれだけ泣かせたことか分りません。この難関を突破することが出来ない結果ついに真如そのものを人間世界から離れた別天地に棚上げしたものと思ひます。しかし吾々は何といつても、真実の世界に出ない限り救われたいことは明かです。ではどうすればよいのか。ここに人類の絶望性と最後の苦悶とがあります。しかしここに唯一つ残された救いの道

があります。それは、自己に対する絶対の否定です。若き求道者長谷川次郎はキリスト教に入れと勧められたとき、「今の自分に於ては、何教に入れ救われると言つたような生ぬるい言葉には動かされなくなつた。いかにすれば救われるかという要点は判つてゐる。それは自己否定の一手あるのみだ」と答えたそうですが、これは明らかに救済の核心を衝いております。

では、その絶対否定は何によつて為されるか、それこそ人間の計らいの雑らぬ真実そのものから為される否定による外はありません。その真実そのものから為される否定を受けるとは、真実の言葉をひたすらに聞くほかはないでしょう。「聞いた」と、自分が思つたときはすでに計らいに墮ちております。自己の絶対否定は、まことの言葉を聞くところのみ受けられるもので、「聞いた」となれぬところが聴聞の極意であります。この点を最も明瞭に御示し下された御方は、我祖を担いで他に見出すことが出来ません。そこで我祖は大膽にも、佛道の万行を聞名の一つに納められたのであります。

(次号に続く)